

# マス・ジャーナリズムとしての批評(一)

——杉山平助と昭和期ジャーナリズム——

山口 功 二

- (一) まえがき
- (二) 源泉としての履歴
- (三) 批評における「哀しさ」の論理
- (四) 批評基準とは何か
- (五) 「短評」と「匿名批評」の意味
- (六) 「社会時評」——先見性の問題(以上は前号に収録)
- (七) 「批評の敗北」
- (八) ニヒリズムと超ジャンル批評
- (九) 批評におけるパーソナリズムと転向

## (七) 「批評の敗北」

ケネス・バークは、『永続性と変化』の書きだしにおいて、批評の成立をつぎのような比喩をもちいて説明している。釣針でひっかけられたが、幸運にもあごを引き裂かれただけでのがれた鱈は、狡くなって、それが食物であるか、または自分を釣り上げる餌であるのかを識別する新しい批評の標準をつくり上げる。

マス・ジャーナリズムとしての批評(一)

このたとえ話を、つぎのようにひらくことができるだろう。この鱒は、次のたべものが目の前にあらわれた時、それが食物かそれとも餌かということと比較検討するサインの体系をもっている。もし、鱒がこうしたサインを集積し、他の同族にそれを伝達することができたとしたら、人間に釣り上げられる鱒の数は激減するはずである。そして、危ういところで釣針からのがれ、餌を識別できる能力と技術をもった鱒は、「批評家」となることができる。さて、杉山平助は、この「生きとし生けるものみな批評家である」という原則をどのようにひらくだろうか。

「批評的性能は、どんな社会どんな世界にでも内在する。それは、動物にさえもある。(略) 犬は嗅覚が敏感だから、もし犬を香道の先生にしたらたいした大家になるであろう。しかしながら批評家といふものは如何なる社会にも存在するわけではないのである。」

すべて生とし生けるものは「批評的性能」と、そのための知識の体系、情報の構造というものを持っている。だが、「批評家」という存在は、社会的な分業の結果、出現してきたのである。原始社会におかれた人々は、生産と消費とが直結しており、商品批評も、生産者は、自分の商品にたいして自ら批評的性能を發揮し、消費者も自ら商品を批評するという関係にあった。この関係枠のなかに「批評家」は存在しない。生産者も消費者も「批評的性能」をそれぞれの立場でつかっているだけである。批評家は、生産者——批評家——消費者という「中間者——媒介」として分業的に位置づけられて、はじめて出現するのである。杉山平助のこうした「批評家」の位置のセッティングは、彼の文学社会学が、マルクス主義の影響のもとに生れてきたことをしめしている。だから、彼が「文学」における社会学的な地図を描く時、資本主義批判の論理を下絵として使っている。文学の社会学は、「商品としての文学」<sup>3)</sup>をめぐる「作者、読者、批評家、出版者」の四元構造としてとらえられる。批評家は、生産者である「作者」と、消費者である「読者」との間にたつて、「商品としての文学」についての「質的な評価」を「媒介的役割」としておこなうのである。だが、こうした役割が正常に機能するとはかぎらない。「出版者」という資本の役割によって干渉をうけるからである。まず第一に、出版業者

の資本集中と独占、第二に著述の商品化の問題がある。この二つの問題はあわさって、第三の問題、文学作品の商品化と同時に批評の商品化という現象をうんだのである。こうした現象は、(i)作家の創作的な自由が商品化という「売れなければならぬ」原理によって圧迫され、(ii)質的な批評によらず、読者を広告的錯覚におとし入れ、(iii)読者の相談人たる批評家の立言の自由を奪いとることになった。こうした過程のなかで、出版業者の利益に反する批評は締めだされ、「批評の市場」は、少数の独占的出版資本の専有するところとなり、「批評」は敗北することになるのである。

この「批評の敗北」状況は、杉山平助にとっては、もっと微妙な、実質的な圧力として加わってきたはずだ。彼は、文学の社会的な四元地図をたがいに等価的な関係にあるものと描いているが、その四者の力の関係のなかで、現実として最も非力である存在は「批評家」であることを認知していたのである。杉山平助と同じ慶応の出身であり、「三田文学」によっていた評論家の矢崎弾は、「杉山平助とインテリ魂」という標題をかかげた杉山平助論のなかで、「僕には、もはや現在の杉山平助を文芸批評家などという限られた世界で眺めるよりも、むしろ転形期の擾乱を泳ぐインテリゲンツィアの代弁者としてより多く彼の表現に興味がある」とのべている。ここにのべられている評言は、ただだんに杉山平助の批評界における動きをのべたものではなくて、知識人にすべて共通の指摘となっている。「批評の敗北」と思想的転換のなかで、杉山平助は素直に、批評はやぶれたのだと論じているのである。そして、この批評の敗北を宣言した時点から、杉山平助は、批評を書きだしているのである。批評はまだ生きていたとはいわず、批評は死んだ。だが、私は、この転換期を泳ぎ抜く。杉山平助の批評へ向う態度は、こうした偽悪的なかたちとして立ちあらわれるのだ。

正統的な知識人の姿勢は、つねに道徳的な偽善の雰囲気につつまれるのがふつうだ。知識人は、人々の蒙をひらき、行動のモデルを与えるという役割をつねにならしている。だから指導者として、諸行動のモデルとしての顔を社会的に期待される。知識人即人徳という徳目的個条を知識人は自らのなかに組みこんでしまうのである。知識人のこの「お上品の伝統」と習俗とは、どのような転換の時に出会っても、かわることはない。だから、知識人にみられる「偽善の伝

「統」は、こうした職業的装飾として、不可避の行動様式として定着しているのである。だが、こうした偽善を貫きとおすことは、職業的な貫徹性として積極的に評価すべき面のあることは否定できない。偽善をつら抜きとおすための精力が、ぐにやつと権力に迎合する行為に抵抗を与えることもありうるだろうからだ。偽善の心意気というものを簡単に否定できない。

だが、杉山平助と同系統の批評家としてもっと大きな仕事をなした大宅壮一は、偽善が正統である知識人世界に一つのアンチ・テーゼをつきつけた。鶴見俊輔は、大宅壮一の「反偽善主義」をつぎのように推論している。<sup>(5)</sup>「帝大新人会的な急進主義のもつ偽善的性格は、一つには、これのにない手となるすくなくない数の学生が裕福な階級の出身であることからきている。」彼らは、生活の心配がないために、急進的な言論、思想をたてうる。だが一たび弾圧にあえば、裕福な背景のなかに逃げこみ、危機的な部分を清算して、偽善的な指導者精神を温存する。だが、「思想だけの上でつじつまをおして完全にいい子になりきろうとするこれら善良な急進主義よりも、むしろ実行力をもつ悪人のほうが好ましい。そこに大宅壮一の悪人、怪物にたいする関心の根がある」と鶴見はのべている。

杉山平助にみられるやや自嘲的な、ピエロ的な偽悪のポーズは、転形期の擾乱を泳ぐスタイルだという意味をもつ。それでは、昭和期ジャーナリズムにおける「転形期」とは何を意味したのか。それを形づくったのは、「転向」とよばれる権力の思想への侵入、それと同時に、思想の市場そのものが、商品化過程のなかで思想創出の自在性をうしなったことにある。杉山平助の批評が探りだした方法は、権力との対決に弱い観念と思想とに依存しないということであった。青野季吉の「杉山氏小論」<sup>(6)</sup>には、こうした杉山平助の批評が威力をもった根源が説明されている。

「現代の人間、とくに昏迷せるインテリは、何か彼にか観念的なものにすがってゐないと、生きて行かれない。彼が唯物論者である場合にも、その唯物論の方法で、『おのれの神』の皮をひんむいたり、尻の穴をむき出してみたりすることは、とうてい出来ない場合が多い。つまり彼は唯物論で武装して、観念論で安心立命しているのである。杉山氏は

当代のインテリにめずらしく、観念の怪物を背負ってゐない。それだけに他人の他愛ない観念遊戯や、自己自瞞が眼につくであろう。」

観念の不確しさを、「転形期」の批評家が自認しているのに、なぜ観念の表装にぶらさがるのだろうか。知識人にとって、「観念」こそが、他の職業人と区別される原点であるからである。知識と批評の世界が、政治・経済・ミタリズムとしての体制の拡大によって、有効な方向性を見出せないことを自認しながら、観念を他のフィールドの人たちよりはうまく操作できるという職業的原点を手放ささないのだ。概念操作の技術は、知識の体系をニヒリズムに変形させた。知識と情報の諸形態が、現状にヴィヴィッドにコミットし、現実の社会変革の力となるといった積極的な意味をうしない、断片としての知識をくみあわせ、商品化する概念操作の技術だけが残った。それは、「他愛ない観念遊戯」「自己偽瞞」でしかない。そして、マス・ジャーナリズムの世界は、もはや観念のかたちとしての批評を必要とはしなくなっていたといえるだろう。

さて、「批評の敗北」が、批評界と読者にどのような衝激を与えただろうか。職業としての批評家にたいする不安と不信が育った。文壇やセクトの代弁者である批評家、ある出版社と結托しているコピー・ライターのような批評家に、自分の行動様式の規範を求めることはできない。ここで大衆が用意した対応の方法は、まづ第一に批評家の発言に含まれた判断と識別を割り引いて読みとる対応の仕方、ディスカウントの方法である。ある集団、あるイデオロギー、ある圧力の下にいうことからくる無理な批評、それが賞めている場合貶している場合の双方を含めて、彼の意志に反した無理じいの部分を薄めたり、割り引いたり、また補足したりする読み方である。

第二は、既判の批評家をさけて、新しい批評家の評言に依存する方法である。矢崎弾によれば、批評の商品化がもたらした歪曲のなかで、「正確な秤を喪ったジャーナリズム」は、批評家内部に正確な秤を求めることをやめて、「局外者批評」を求めた。局外者批評の第一陣は、アカデミズムに求められた。教授、哲学者、社会科学者などの新しい血を

輸入し、新しい識別の基準をつくり出すことであつた。そして、この局外者に批評をまかせるといふ社会学的な対処の方法は、過去の近親相姦的批評に刺戟を与える役割をもつた。戸坂潤や大森義太郎など一連のアカデミズム・クリティックは、こうしたジャーナリズムの要請のうちに生れたのだが、それも権力による転形を迫られた批評の運命をたどるのである。

杉山平助は、アカデミズム・クリティックとはちがつて、文学から生み出され、新しい批評のかたちをつくつた点で評価されるだろう。彼は、小説の実作者として、大正一四年に自叙伝風な長篇小説「日本人」を書き、また慶応予科時代に結核におかされ、湘南のサナトリウムで療養を余儀なくされていたころの恋愛を私小説風にまとめた「砂丘の陰」を昭和四年に「三田文学」に連載した。また彼が批評家としてジャーナリズムに活躍しはじめてからも、中国女性との交際を中心とする「自由花」という短篇集を発売している。批評の伝統からいえば、彼は「内部」の批評家だといえるだろう。「内部」にしながら、内部の論理を抜け出す方法を杉山平助は、発見した。それは、前にのべたように、「匿名批評」の方法だったのである。文学の内部世界に在るものが、内部の商品としての文学を批評するのは、読者に割りびかれてしか受けとられなくなつた状況のなかで、匿名批評の方法は、率直でリアルな批評としての幻想を与えるのに十分であつた。部内者が、覆面で内部の内実を暴露するという偽悪的な手法が、マス・ジャーナリズムの新しい秤の一つとなつた。「文芸春秋」の「文芸春秋欄」や「東京朝日新聞」の「豆戦壁欄」といふ杉山平助の匿名批評について、矢崎弾は次のように論じている。彼は、まず杉山平助の匿名批評の好評が、ジャーナリズムにおける匿名批評の隆盛をもたらしたことをのべ、匿名批評が、「短評の形式でなければ評論のかけない批評家が、つまり評論を長く徹底的に糾明する論理的訓練や悪意のない批評家の不満の吐けぐちでもあつたのだ。(略)あるいはまたジャーナリズムに縛られた作家批評家とその不満を洩らす方法として匿名を必要とした点もあろう。」

職業人批評としての批評の敗北は、じつはいつてくる大衆先行の批評のかたちをつくつたといえるだろう。短評匿名

の批評形式は、一つには、批評のアマチュアリズムのかたちでもあった。論理的、観念的概念操作の訓練をうけていない書き手であっても、短評のかたちは書きうるということはある。匿名批評は、匿名であるということ、**「有名人」**としての虚名を必要としない。それが一番近い批評の形式は「投書」というジャンルである。投書は、署名入りであったとしても一般読者にとってその署名人は無名であるに等しい。書かれている批評それ自身が**「力」**が重要なのだという点でひどく似通うジャンルである。

杉山平助が「批評の敗北」という評論を締めくくった最後の一節に、批評のあるべき姿は、「作者と読者との直接的関係の恢復」、「資本の否定」そして「最高の理想は批評の否定」であるとしている。そして「即ち批評の勝利とは、批評能力があらゆる民衆に行き渡り、専門的職業内批評家の必要がこの地上から一掃せられた時代のことを指して云うのだ、という認識が重要だ」と結論づける。

#### (六) ニヒリズムと超ジャンル批評

「批評の敗北」は、批評を狭い知識人階級の相互批評のかたちから大衆化への道を歩ませることになる。知識人の指導性の破綻、その偽瞞的な言論よりも、むしろ大衆のただなかにおいて、大衆の期待と願望と結びつくことのほうが、より誠実な態度ではないか。それは、アカデミズムを中軸とする正統派から「ジャーナリストイックな」という軽蔑の形容をうける批評の形態に賭けることであった。

阿部真之助は、昭和八年のこうしたジャーナリズムの現状を踏まえた上で、「八裂き事件とジャーナリズム<sup>(9)</sup>」という評論を書いているが、その中で「ジャーナリズム」とは、一口にいえば、「ストーリーを売る商売である」とのべている。この定義の仕方は、公式のジャーナリズムの定義からみれば、あきらかに「偽悪的な定義」である。ジャーナリズムの社会的使命などという大上段のかまえかたは、この定義の連続のなかに読みとることはできない。ジャーナリズム

の前衛を毎日新聞学芸部長としてつとめていた阿部真之助にとって、「批評の敗北」の様相は、誰にもまして、実感としてうけとめえたにちがいない。いまさら偽善的なジャーナリズム定義など、彼のジャーナリストとしての誠実さからして、できる相談ではなかったろう。だから、他の多くの有能なジャーナリストたちと同じように、つねに「偽悪の表明」を続けなければならなかった。

「ジャーナリズムは、現実には、誰が何といほうと、興味を本位とするイズムである。その限りでは、善でも悪でもないが、その弊は、理想を忘れ指導精神を忘れ、皮相軽薄俗に迎合するのみで、時に美事善行を売り物にする為<sup>(10)</sup>に、却って根性の下劣さを曝露するものさへある。」

ジャーナリズムを「興味本位のイズム」と定義する阿部真之助は、「皮相軽薄衆俗に迎合する」ジャーナリズムを、まづ善悪の判断レベルにおいて「中立的」な存在として規定する。問題なのは、「指導精神と理想」を忘れているのに、「美事善行を売り物」とすることで、逆にその偽善的な品性を露呈するのだと論じている。「批評の敗北」の時点において、ジャーナリズムはすでに批判精神と指導精神をうしなっているのだ。あとは、衆俗の興味に迎合するしかないという「偽悪」の姿勢は、じつは昭和期ジャーナリズムをおそった病いであったのだ。「興味」に迎合することの「中立性」に賭けることのニヒリズムこそが、その病いの名称だったといえるのではないか。

自己のジャーナリズムの根源性にたいする問いかけは、ここでは何一つとして存在しない。語るべきこと、批判すべきことの根源性なしに「書く」というニヒリズムが生れてきたのである。それは、「技術としてのニヒリズム」の一種である。「なぜ書くのか」という問いかけはないのだ。ただ興味の動向にむかって書きつづる技術だけが成長するのである。このニヒリズムにおちこんだ書き手は、自分が一体誰に向って書いているのか、自分の書きつづったものが、読者をどのように効果づけ、どのような行動を結実させるのかを想像できなくなる。送り手——受け手という精神共同体としてのコミュニケーションは消滅する。書くことの社会的な感覚がうしなわれるのである。マス・ジャーナリズムの諸問題



は、このように、送り手が受け手の反応を読みこめないコミュニケーションの不能性の上に打ちたてられる。送り手は、売れるか売れないかという擬似コミュニケーションの照準だけをたよりに自己のジャーナリズムの妥当性を測るという恐ろしい状況のうえで揺れているのである。そのジャーナリズムが売れているからといって、コミュニケーションが成立するものだろうか。コミュニケーションの成立が、商品売上の尺度によるものでないことぐらいジャーナリズムで働いている人々は先刻御承知なのである。コミュニケーションの成立がかくも測りたいために、仮の照準として措定しているだけにすぎないのだ。この措定としての照準に自己の識別基準を置いていることの不安と不確しかさの感覚が、逆に「ニヒリズム」としてのジャーナリズムを呼びこらせるという悪循環をひきおこしているのである。

だが、この「ニヒリズム」が、批評にとってマイナスの方向にばかり動いたというふうに見えるのはまちがいである。このニヒリズムの出生の根源は、理想とか理念とかいうものが、支配権力とその体制にひどく弱いものであるということとを証明してしまったところにあるといっている。このニヒリズムに先行する知識人左翼にみられる知的斉合性を今一度検討してみるという機能をもったと考えられるからである。その再考の一つに、超ジャンル批評のかたちがある。その代表的な言及を新居格の著述からひろいだしてみよう。

「由来、わたしは表現形式を深く意に介しないものである。表現形式は、筆者がその場合場合採用したいと思ふものを随意に採用すればいいので、論文と創作と、随筆と、感想と即ちさうした表現形式の差異によって評価が差異さるべきでない、少なくとも、わたしは信じてゐる。その形式の如何を問はず、わたしは、あたらしい何物かが、そこに表われて居れば足れりと思つてゐるだけである。」<sup>(14)</sup>

批評の形式は、観念の斉合性と体系性のジャンルとしてとらえられるという正統性を新居格は、すでに捨てはじめている。そして、杉山平助における批評の形も、この新居格の言及と同じ文脈で語られている。「小説」とわざわざそのジャンル名を冠した「下層一断面」のなかで、次のような感想をしるしている。<sup>(15)</sup>

「本篇は、……小説体の評論、或は評論体の小説、どつちとも云はれる所を狙った。かき終つた後の気持は、何か歪みなく、感想し得た時の心の滑かさと感じ得た。今後からかういふ形式の社会批評をポツポツやつて見ようかといふ気持さへ起つて来た。詩、小説、評論、この三者の融合が僕の文芸上の持論である。」

この杉山平助の超ジャンルの名著述への関心は、批評の新しい形式の予感であったといえるだろう。この新形式の社会批評は、二つの流れにたいする批評としてあらわれているように思える。その一つは、仲間ぼめに終始するふい「文壇内批評」の体制であつたらうし、もう一方は、公式的でややもすれば観念論に流れがちな左翼批評の体制であつた。文壇内の細微な保身主義的批評の猥小性とプロレタリア階級論の論理的起結から公式的に割り出してくる批評の不毛性を、杉山平助にしろ、新居格にしろ適格に先取りしていたといえるだろう。吉野作造からくる大正期リベラリズムの系譜のなかで、このように超ジャンル批評を考えた杉山平助とアナーキズムの系譜からみちびかれてくる新居格というふうには、それぞれの思想的祖先をたがえてはいるが、両者に一貫して流れるのは、「私」の全身的な表現形態としての超ジャンル批評である。形式がもつ威光というものにとらわれずに、「私」の表現を可能にするもの、「私」の感想を歪みなく語りこめるような独自の形式をつくりだすこと、それが逆に、思考の自由をもたらずというふうには考えたのである。小説という形式のもつ物語り性、評論文に個有の表現のかたさ、それぞれのジャンルにおける表現の長短は、もっと柔軟な、多様な表現ジャンルの使いわけと、私独自の表現形式によってのりこえられなければならない。そして、こうしたその人に個有の表現形式は、それだけで、読者に「あたらしさ」の感覚をうえるものとなるだろう。そして、この表現形式のあたらしさと多様さとは、現代社会のはらむ新しくも多様な諸問題を対象とし、それを解析し、説明する有効な武器となるであろう。

マス・ジャーナリズムは、それだけで一つの現代的な社会現象なのだ。批評が、一流の知識人、エリートたちの啓蒙主義と指導性によって運ばれる時代は、すでに過去のことだという認識をはらんでいるのである。多様性の時代を、一

個の卓抜した才能、ある大前提としての思想だけにたよって、ジャーナリズムが生き抜くことは不可能である。二流の才能は、二流の生き様を生きる人にとって有用であるという批評における二流主義が、マス・ジャーナリズムを生み育てた。大衆にとって、識別しなければならぬ範囲とレベルは大きな幅をもっており、判断しなければならぬ思想は数量として目の前に投げ出されている。そして、このようなマス状況は、ただマス・ジャーナリズムの受け手である大衆のレベルにおいて存在しているのではなかった。思想の送り手である知識人の側にも同様におこったことであつたのだ。たとえば、室伏高信の『椰子』<sup>(13)</sup>は、一個のジャーナリストが、波間をただよう椰子の実のようにその時々々の動向を大きな振巾で揺れ動いたことをあきらかにしている書物である。室伏の思想的な借り着は、時代的な便乗的変化のかたちであられるだけではなくて、共時的に、同時にすらあらわれたのである。大宅壮一は、室伏高信の著書「アメリカ」の書評のなかで、彼を「思想的千足動物」とよび、「縦に見て、氏はデモクラシーその他幾変遷を経てゐるかかわらないのみならず、横に見て、現在の氏の頭脳を彩つてゐる原色を見極めることは、更に困難である。」そして、彼の著書は、どれを取りあげても一つの思想的立脚点から見まわされたものではなくて、「種々雑多な観点からみた種々雑多な内容を無統一に、雑然混然と並列した」<sup>(14)</sup>ものだと論じている。

このような知識人指導者の思想的混乱は、室伏高信、ただ一人に個有のものではない。彼のエピソードたちは無数にいたといえよう。室伏高信は、こうしたマス・ジャーナリズムの一頂点をかたちづくっていたのである。マス・ジャーナリズムの世界を泳ぐための技術は、室伏高信のように数限りない観点を通時的に動き、また共時的には、混色として自分を呈示するか、あるいは、杉山平助や新居格のようにあるがままの「私」を数限りない雑多さにぶつつける批評であつた。こうしたジャーナリズムの不確かな上部構造を前にして、大衆は、識別の機縁をもたないまま、立ちすくむか、自らの日常性と体験から自ら決断を下すか、「私」自身を主観的に表現してくる批評家の個性に共感し、また反撥するか以外に知識識別の道をとぎされていたといえよう。

大衆化現象下のニヒリズムにたいして、表現の形式は、極度の個性主義——パーソナリズムと結びつくことになった。それは、ものみな絶対的な標準とならないという価値喪失時代の特質である。そして、この期の個性主義は、啓蒙期における知識人優位の超絶的な個人という形態をうしなっている。それは、ちよっぴりの面白さでも表現できるパーソナリズムだ。マスとしての群衆のなから首一つだけ浮き上がった異質なものが、異端なパーソナリティであってよいのだ。これは微差としての個性主義というふうに考えられるだろう。バーナード・ショーのいう「二流ものの時代」が、このマス・ジャーナリズムを支えているのである。マス・ジャーナリズムに価値の標準らしいものがあるとすれば、それは自分と似つかわしいものへの共感とよばれるものであろう。

レオ・ローウェンタール(Leo Lowenthal)の大衆誌にあらわれた人物の分析は、<sup>(15)</sup>「大衆のアイドル」が、一九〇一年から一九四一年の間に、政治・実業・職業人から、娯楽の領域の人物に移ったことをあきらかにした。そして、その娯楽の領域におけるヒーローも、シリアスな芸術の分野からもっと大衆的な分野に移動したことを分析してみた。この研究のオリジナルな発表は、一九四三年のことであったが、それに先立つ一九三〇年に、新居格は、この研究がさしめしたのと同じ指摘を行なっている。それは、鶴見祐輔の『英雄待望論』にたいする批判としてでてきたものであった。鶴見祐輔の『英雄待望論』は、一つのアナクロニズムでありながら、逆説的にことほどさように、この時代において『英雄』の姿勢がうしなわれていたのだということをはっきりとした機縁をになうことになった。英雄の見当らぬ平準化状況が、英雄の出現を要請させたのだ。

「現代の青年は、英雄たらんとするよりも登場者たらんとするかも知れない。鶴見君等の見解は狭小で政治家、思想家その他一世を指導すると云った古風の堅苦しい考え方に膠着してゐるが、現代の青年はもっと自由だ。鶴見君等に云はせれば、僕等の云ふ『現代の登場者』の一つであるスポーツマンなどの如きは認めないかも知れないが、(略)『現代の登場者』に即して見るがいい。水泳選手鶴田や高石は、田中義一や後藤新平に比して遙かに待望されて、その待望

量は多いのである」。(16) 「政治家や思想家」といった指導する側に共感の力点をもちえない青年大衆の出現を明解に言いきっている。末は博士か大臣かといった階級的な上昇思考の欠如、指導精神といった知識人への同感などというものは、すでに「幼稚な考え方」にすぎない。そして「現代の登場者」は、その価値基準を、優劣、上下といった上昇思想的な観点によって定めるのではない。それは、自己同一化 (identification) の度合によって測られるのである。自分がその対象にどのような強度で同一化するかという問題のたてかた、これは価値認識といった理念型で求められるものではない。既製思想信条、水陸づけられた徳目表などには、無縁なかたちで、現代のアイドルは求められる。人々は、それぞれの日常生活の体感をたよりに決断するともない自己決定として、好ましさをうけとめているのである。だから各人各様の好ましさをの強さというものがあつて、現代のアイドルは、その多様性に支えられているのである。新居格は、つづけて次のように論じている。

「今は登場者が多くなつた。それぞれの分野にそれぞれの登場者があつて、それに甲乙はつけられない。ファン……それは泡の如きもの、采喝によって表示されるひびきの如きものだ——を多くもつ性格のものが時代の登場者である」。

大衆のこのような動向にあわせて、批評は変質する。杉山平助や新居格などにみられた批評形式の超越性は、ここで、じつは形式の超越だけでなく、批評対象の超ジャンル性——多様性であつたことを証明するのだ。超ジャンル批評の原則は、「形式」と「対象領域」の双方を覆うものであり、判断の基準に「私」を置くものであつた。ここに対象領域の面白さをとらえつつ渡り歩くという超ジャンル批評が成立するのである。

文芸批評家として出発した杉山平助の批評領域の多岐性は、あきらかに「文学」という対象の唯一性への懐疑から始まっている。かつて、日本における批評の世界は「文学」の領域に限られていたといつてよい。だが、昭和期ジャーナリズムは、昂進する娯楽領域の拡大にささえられて、大きく取扱ひ領域をひろげた。大衆にとって接触が不能と考えられていた政治や経済の分野も、娯楽原則によって読みかえられたわかりやすく、おもしろい読みものとして取り扱われ

るようになった。杉山平助の批評の「文学離れ」は、矢崎弾の指摘にあるように、「文学の批評、鑑賞も、かれにはもはや現代の起伏に富む現実社会と接触する機縁をさがし求める以外の作業ではない」ところから始まるのである。対象を文学批評という場面においた時でも、現代社会の現象批評という形に変質する。「文学の社会的な価値と効用」という杉山平助の文学上の諸テーマは、彼が結局のところ、文学そのものを社会現象の一面面としてとらえていることをさししめすものである。彼は、文学者として、小説の実作者として出立したにもかかわらず、文学を社会学的観点から論じた。そして、昭和初期から戦中にかけて歴大な批評を書きつづけたにもかかわらず、現在ではあたかも泡沫的批評家扱いされる由縁は、彼の思想とか力量の問題だけで説明されるものではない。批評といえば、純文学上のそれをさすという伝統が、今なお生きており、杉山平助や大宅壮一などの社会学的批評の系譜を傍系へと追いやっているのである。さて、杉山平助が、文学批評からどのような分野に向けて動いたかを「文芸春秋」「中央公論」「改造」という三大綜合誌中から取りだしてみよう。

「文芸春秋」に発表された主だった文学論は、「帝国文芸院創設論」(昭和一〇年八月号。以下10/8とする)、<sup>17)</sup>「文壇人の経済」(10/9)、「政治家と文学者」(11/3)、「新聞小説の社会性」(13/9)、等の標題からも推測できるように、政治・社会的な視線による文学評論であり、「中央公論」に発表されたものは、「菊地寛論」(8/8)、「西条八十論」(9/5)、「現代批評論」(9/10)、「文壇幕ノ内論」(9/12)、「横光利一と室生犀星」(10/11)、「千葉亀雄氏回想」(10/11)、「生田長江先生と私」(11/2)、「文学青年論」(11/8)、「芸術家とモラル」(12/5)、「ダマソツィオと愛国文学者」(11/3)、「日本人と日本文学」(13/5)、「過渡期の文学者」(14/9)など、一見純文学的な批評テーマが感じられるが、その内容は、人間論と風俗的文学論が中軸となっている。また、ここには、「家出・自殺・情死」(8/6)、「青酸加里のいたずら」(11/3)、「夜の宿リポルタージュ・帝国ホテル」「邪宗教とデカダンス」などの風俗分析的な評論がおおい。だが、「改造」に発表された諸評論を一覧すると、すでに「文学」に

関する評論は影をひそめ、また風俗論に関するものも姿をかくす。そのかわりに、圧倒的に多くなるのは、思想批判と政治、社会評論、植民地ルポルタージュなどである。「改造」への発表は、昭和一二年の「日中戦争」に関するものが、昭和一六年にいたるまで毎号といえるほど頻繁におこなわれている。「改造」の特派員として「日中戦争」に従軍したそのルポルタージュが中心をなしている。そのうちのいくつかの表題と発表年月をしるしてみる。「現役政治評論家を批判す」(9/11)、「自由主義教授論」(10/4)、「デレタラント論」(10/9)、「危機における日本のインテリゲンチヤを分析す」(13/4)、「支那思想対策論」(13/10)、「現代思潮の展望」(14/8)、「松岡外相論」(15/11)、「東条内閣と国民の決意」(16/11)など。ルポルタージュとしては、「北支行」(12/12)、「揚子江手記—漢口戦従軍記」(13/11)、「従軍おぼえ書き」(13/12)など、数多くある。

杉山平助の発表は、これら三大綜合誌にとどまらず、「東京朝日」読売」「日々」「都」「時事」「国民」、また「現代」「新潮」「三田文学」「婦人公論」「日本評論」「婦人の友」などの新聞・雑誌に渡っている。そして、その内容も、ダンサー論からホテル、相撲を論じ、ラジオ、レコード界、人生相談、漫画を論じる。さらに自然主義からプロレタリア文学、リベラリストから政財界の人物までを論じ、国内問題から中国、東亞論にまでおよぶカバレッジの広がりを持っている。また表現の形式も、詩あり、小説あり、随想、評論、ルポルタージュと多岐にわたっている。

さて、杉山平助のこのひろがりをつながかなめは一体何だったのだろう。これほどの超ジャンル性は、昭和期ジャーナリズムの世界では珍らしいことではない。たとえば、大宅壮一などは、彼よりも大きな対象の容量をもっているし、その分析は鋭く深い。大宅壮一のような著名な評論家についても、その超ジャンル性への疑問をきかない。この程度の超ジャンル評論は、自明なこととして誰もおどろかなくなっているのが現状である。トランプのジョーカーのように何にでも変身できる存在として、現在の批評家は存在するのである。道化としての軽薄さに耐えるのが、現代における職業批評家の要件である。現在の批評家も「現代の登壇者」の役割をになわなければならない。批評対象にたいする分析

の深度、知識の集積度といった職業人としての価値尺度は、この市場ではあまり力をもたない。「玄人好み」「素人ごのみ」という分類の仕方にしたがえば、マス・ジャーナリズムにおける批評は、「素人ごのみ」でなければならぬ。すでに幾度かくりかえしたように、重々しい知識人のうらに、じつは、軽々しくくると右にまわる振子があったのだという、重厚さ、厳しさへの不信感というものを無視することはできない。道化も哲学者も同じ人間的弱点を共有しあっているのだという人間認識がある。私たちは、この対象について、どれほど教養をつんでいるのかということを絶対的であるとは思わない。むしろ、この対象にどのような真向いかたをするのかという一点を見詰めるのである。専門家の対象への向いかたは、瑣末へ瑣末へと深く掘りすすみ、大衆の願望や興味関心のありようといったところとは別なところで楽しむ傾向をもつ。杉山平助は、こうした大衆の不満をすくいあげる批評のかたちをつくりだした先行者の一人であったといえるであろう。

(九) 批評におけるパーソナリズムと転向

新居格は、昭和十一年という時点に立って、現代は「情熱過重時代」だと断定している。情熱の過重は、ラジオの野球放送のなかでアナウンサーが声に力をこめて、「昂奮と感激の」ということばを無暗と多用するエピソードから語りだされるのだが、この傾向は、あらゆる領域に見出される。

「熱と意気、昂奮と感激、それらの言葉なり、表現なりを現代は無性に喜ぶように訓練されてゐる。そして、それらこそ時代の道徳の如くなつてゐる。(略)情熱の過重は理性の軽視に傾く。情熱、昂奮、感熱、陶酔と云つた状態は華やかだとされがちである。云はばロマンチックだ。しかし、それが必要以上になり、過剰になるとセンチメンタルになる<sup>(18)</sup>」。



情熱の過剩現象は、十五年戦争を遂行するための原動力として作用し、それらは、民族の栄光をロマンティックにうたいあげ、センチメンタルな感涙を誘い、フアンティズムとして機能することになった。理性的な判断の喪失が、大衆社会の病理なのだ。一つの理論として、大衆社会は高度選択社会だとのべられている。この社会にあって、情報が量的に多大であり、質的に多様であるために、個人は高度な選択性を身につけないと、「私」を分裂させ、崩壊するといふふうには理解されている。だが、雑駁に仮説、というよりは一つの推論をたててみると、大衆は多くの場合、あれかこれかといった識別作用を理性的におこなっているというのではない。むしろ、自己同化への対象を渡り歩いているといつてよいのではないだろうか。選択能力といったものではなく、幻想期待、のりうつりへの期待といったものだ。ある好ましさを見出すとそこに同一化の自己投企をおこない、また別の好ましさにうつろう行為の集積であるといえる。大宅壮一は「文壇ギルドの解体期―大正十五年における我国ジャーナリズムの一断面―」<sup>(9)</sup>のなかで「先生褒め」「弟子褒め」「仲間褒め」といった文壇ギルドの崩壊の一要因として「素人」の文壇侵入を取り上げている。「文壇的名声」「芸術味」の不足している「素人」でも、「面白くさへあれば」、読者をつかむことができることの意味、それは大衆社会が一つの理念、原則でもって何かを選択してゆくといい作業から、感性による同一化を目指していることを証拠づけている。

情熱の過重の具体的な症例は、あきらかに「ファン気質」のなかに見出される。対象に対して、惚れこんでゆくフアンティズム、それが危機的状況下における大衆の一面面である。危機的状況下にある大衆は、ニヒリズムから脱出しようとして、仮装された情熱を好ましい政策なり、人物なりにぶつつける。離脱のためのモデルがあやうくなればなるほど情熱的、熱狂的態度を昂進させる。一五年戦争下にあるジャーナリズム界に「人物論」が大きな役割を占めていた理由の一端もここにあるのだ。文学、ならびにジャーナリズムの世界で「プロレタリア文学運動」は、一つの科学的で理性的な「新しい批評尺度」をもたらしただがこの「新しい批評尺度」は、おもに社会の分析と批評のためにつかわれ

ただで、分断された大衆を救済するパースナルなモデルとして機能しなかったといつてよいだろう。この社会は科学的に分析してみせずとも、私たちにはその歪みを日々体感することができる。科学的に階級の矛盾を示されたとして、大衆は闘争への意欲をかきたてるどころか、敗北感と無力感とでますますニヒリズムの淵におちてしまう。ましてや、「プロレタリアの旗」は、弾圧と自己崩壊のなかで破産したではないか。「人物論」として芽吹いたパースナルリズムは、こうした理性と観念中心主義への反攻として出立するのである。鶴見俊輔は、大宅壮一の「転向」をとらえて、つぎのような彩やかなことばのとらえ方をしている。それは、大宅の「無思想人宣言」の有名なさわりの部分に関してなのであるが、彼が昭和七年に検査された時、特高刑事の転向要求に「ぼくが転向すると共産党になりますよ」と答えたそのあとの部分である。

『その後私は、いかなる主義主張にも同調しなかつた。私は私流に生きて行くほかないと考えた。』（傍点鶴見）この文章で『その後』という言葉は実によくきいている。<sup>(2)</sup>

鶴見のいうように、大宅壮一は、「その後」、マルクス主義にとられることはなかつた。だが、「その前」には、マルクス主義の思想にとらかれていたのだということを明らかにする言葉でもあるのだ。そして、問題なのは、次の一行である。「私は私流に生きてゆく」というパラグラフは、この同じ時期に生きたジャーナリストたちがすべて感じたであろう思いがこめられていると思うのだ。私の理念世界をつかさどる超自我だけで社会につながるのではなく、「私のくらし」「私の感性」「私の欲望」を自由にするつながり方をもとめたのだ。マルクスのテキストにかえて現実を批判するといった批評をやめて、私を自由に語らせる時、大衆の願望と不満の構造にうまく出会うことができる。大衆の喝采に一度出会ったジャーナリズムの行方は、この出合いの質的な問いかけをもたずに、幻想としての連帯感をもたにして、大衆の動く方向に身をねじってゆくジャーナルを書きつづけることになる。

「私流」になるまでに「とらわれの時代」を持つというのが、この時代に共通した知識人の体験の形であった。杉山

平助においても、吉野作造のもとに出かけて、実行運動に加わりたいという志望をもらしたりしている。<sup>(2)</sup>この「とらわれる時代」を素早く抜けだし、もっとも急テンポな「転向」へと自覚的に踏み出したのが杉山平助などであったといえるのではないか。小説家として、批評家としての出立の前に長い実生活上の苦難の時代をもっていた杉山平助は、とらわれることの度合が弱かったのだろう。観念とか原則にとらわれるよりも、私の流儀に従う書きかたが、読者の共感の体系に接近できるということを見抜いたのである。大衆化社会における読者は、明確な専門家意識、職業人的観点から読むのではなくて、高度の概念操作能力も知識、情報ももたない素人として存在しているのであり、彼らにとって読みとりやすいものは、現実の人間としての論理であった。だから批評も、原則と概念を対象とする場合においても「人からみの批評」として呈示され、受けとめられねばならなかったのである。人々は、理念と現実生活を妥協させて生きている。素人としての読者は、まづ人間にたいする共感から、観念の生活へ入りこんでゆくことができるのである。ニヒリズムからの脱出の拠点を書き手も受け手もこの人間という一点におくことで、観念の無産性をすくおうとしたのではないか。

それでは、杉山平助にかえて、現実批評のパースナリズムがどのように機能したのかを考えてみよう。杉山平助には、昭和九年に改造社からだした『人物論』と昭和一二年、亜星書店刊の『街の人物評論』という二冊の人物論集がある。前者の「人物論」をみてみると、ここで取り上げられた人物は五五名、その内訳は、(i)「文壇人物論」、(ii)「私立大学長論」、(iii)「現代政治評論家論」、(iv)「当代リベラリスト評判記」、(v)「漫画家総まくり」、(vi)「新漫画派集団の人々」となっている。ふつう人物論といえば、歴史上の人物、物故して評価の固まりつつある人物などが取り扱われる場合がおおいのだが、杉山平助の人物論は、徹底した「時の人」としての人物論であることに注目したい。同時代の話題をあるテーマとしてとらえるのではなくて、「人がらみ」としてとらえてくるのだ。社会時評家として、杉山平助がこの困難の状況を彈圧検査という陥穽になぜひっかからなかったのかという理由もここに一端がある。「私流」の批評と

してのパーソナリズムは、権力の側からみれば、プロレタリア文学理論とかマルクス主義とかの反体制のイデオロギーを取り出しにくい。そして、パーソナリズムとしての批評が、その批評の対象を、「体制」に置くのではなくて、「人物」においているために、直接的に干渉することができない。個人論は、体制論よりも安全であったといえるだろう。このような理由から昭和期ジャーナリズムは、人物論を主要な柱としたのであった。しかし、このような批評の方法は、新居格の指摘にしたがえば、「批評形式からいえば、人物を批評対象とする評論ではあるが、噂を論理化したようなもの」<sup>(2)</sup>であった。形式は批評でありながら、その内実は、批判の力を欠く、一種のジャーナリスティックな読みものに墮してゆく傾向をもっていた。

杉山平助におけるパーソナリズムの表現としての「人物論」は、一応昭和一二年の「日中戦争」までに終了する。この時期の彼は、すでに他人を月旦する「人物論」を書くよりも、他人によって人物批評される立場に上昇してしまっている。パーソナリズムは、ここで、他者を語るという形ではなくて、自己を踊らせるという形に変質するのである。杉山平助における「転向」は、自分の思想と感情とを時代の動向のなかで読んでゆく過程においてあらわれた。「私」のなかに今どのような感情が主流となっているか。それを自動的に発露させる機縁となったのは、昭和十二年、日中戦争下の中国大陸における体験であった。彼が、「朝日新聞」と「改造」の特派員として書いた一連の中国ジャーナルは、昭和十三年に刊行された「揚子江艦隊従軍記」と「支那と支那人と日本」とまとめられている。ジャーナリストとしての従軍の最中に彼が急激な民族的感情をもちあげてゆくプロセスが描かれている。昭和十二年は、近衛内閣による「国民精神総動員」が告諭された年でもある。キリスト教までが、「皇国基督教道同盟」といった協力体制をつくり、その宣言のなかで、「外国の借物でない、日本人の、日本国の、日本基督教を確立せん」といい、「純正日本精神を顕揚し、凡ゆる唯物思想を克服し、日本及び全世界を神国の慈光のうちに光耀せしめん」と書きこんだほどに民族的感情が高潮した時である。杉山平助の中国ジャーナルには、このような動勢を下じきにした民族的感情が「昂奮と感激と」で綴り

こまれている。

下地としての民族感情は、現実の戦場に赴いた時、更にその「情熱の過重」に見まわれる。兵士のように自分は闘って  
いず、ただ見ているだけの「ジャーナリスト」であるという負の感覚は、戦いはつらく嫌なものという兵士の実感情と  
はうらはらに、彼らを激励し、督促し、民族的意識を高揚し増巾しなければならぬというフアナティズムにかけこ  
んでゆく。他の特派作家たちが、生命ほしさに安全地帯で下船したのをわらい、進んで前線に向う時におこってくる感  
情は、すでに客観的な理性主義を否定しきっている。それを説明する一つのエピソードを「揚子江艦隊従軍記」から抜  
きだしてみよう。

揚子江を遡行中の杉山平助は、日本軍に撃沈されたいらしいジャンクの切れ端にのって流れている中国人の母と幼い子  
の姿を見た。同じ年ごろの子を持つ杉山は、その姿に国に残してきた我が子を思い出し、一瞬戦争の悲惨に胸をつかれ  
るのだが、直に「これでいいのだ」とその感情を殺したのである。なぜ、「これでいいのだ」と決意したのかは、ここ  
で言葉として説明されない。これは、杉山平助のパーソナリズムの変貌を物語るものだと考えられよう。以前の杉山で  
あれば、被災した母子にたいする感傷を論理化するジャーナルを書きえたはずである。だが、彼は、ここでこのパー  
ソリズムとしての感傷を一举にとびこえてしまい、「私」とはまったく結びつかない民族主義的な非合理主義に身をま  
かせてしまうのである。杉山平助の批評における感情の変質図を書割り的な図柄としてみれば、社会的正義に向う感情  
→私を中心とする感情→民族主義的な感情といったふうに表示することができよう。パーソナリズムとしての感  
情は、「これでいいのだ」という自動シャッターにさえぎられて、民族主義的な感情の下に扼殺されてしまうのである。  
彼のジャーナリズムがどこまで来てしまったかをしめす文章を幾つか掲げてみよう。

「私、いつか北京で、どうも支那人は素質の劣等な人間の数が多すぎる。これを半数ぐらゐるまでにする方法はないも  
のだろうか、と放言したら、きつい眼を光らせ、血液を逆流させたやうな顔つきをした日本人がいた。」<sup>(28)</sup>

次は熱海の温泉に中国から帰った知人と一夜を語りあった時の記述である。

「こんな温泉へつかった時の感想は、とたずねてみると『こんなところへ支那人を入れたくないナーという考へがいちばんに浮かびますね』という返事であった。／私たちは哄笑した。これまでの私だったら、こんな言葉にあんまり好感をいだかなかったことであろう。しかし現在では、彼の気分がよくわかるのである。／支那人に対するインテリ的な、好な同情心なんか、屁の役にもたつものではない。支那人と日本人は、絶対に差別待遇をしなければならんと、私は考へてゐるのである。」(俵点山口)

「これまでの私だったら」というものいいは、大宅壮一の「その後、私は、いかなる主義主張にも同調しなかった」という発言とくらべあわせてみると面白い。「これまでの私」という表現、「その後」という表現は、ともに何らかの「転向」を無意識裡に表白したものだ。同じ有能な現実感覚をもちながら、これまでの「私」とはちがうファナティックな感情の主義主張に向う杉山平助と、その後、主義主張に同調しなくなる大宅壮一の「私流」のジャーナリズムとが截然と浮彫りにされる。

杉山平助の批評は、つねに「私」のオートマティカルな表出からなりたっている。彼の複雑な出生と、病氣失意の青春時代の体験とは、彼の人物をみる視線に現実的なひろがりやと深さとを与えた。パーソナリティの市場としてのマス・ジャーナリズムの世界は、彼の意気のない感性としての批評を求めていた。社会分析の理論においても、文学者としての資質においても、さほど豊かであったといえない彼の批評がうけいれられたのは、ふつうの人間としての感情表現にあったといえるだろう。大衆は、知識人批評の「たてまえ」としての観念に飽食しており、杉山平助が、こうしたインテリのためまえ論を罵倒し、「ほんね」としての現実感情をあきらかにすることをよろこんだ。このような現実感覚は、彼の批評を大衆に近づけさせたが、「ほんね」のある部分をファナティックに拡大するジャーナルを書くことで、平均

的な大衆の常識を通りこしてしまったといえるだろう。彼のおちいった批評上の陥穽は、「私」の感情に忠実であろうとする志が、じつは、私をこえた民族の感情にとらわれていたのだという点にあった。民族の感情が高潮期に向う時に、私があるがままに衝突させる時におこる相剩作用が、彼の初期のジャーナリズムから遠くはなれた批評をうんでしまったのである。(完)

注

- (1) Kenneth Burke, *Permanence and Change*, 1935, P. 5.
- (2) 杉山平助「批評の敗北」『評論と隨筆春風を斬る』所収。大垣書店、昭和八年。六一頁。
- (3) 杉山平助「商品としての文学」前掲書所収、五二―一六〇頁。
- (4) 矢崎弾「杉山平助とインテリ魂」『過渡期文学の断層』所収。昭森社、昭和十二年。
- (5) 鶴見俊輔「後期新人会員―林房雄 大宅壮一」、思想の科学編集会『転向』(上)所収。平凡社、昭和三四年。一四六頁。
- (6) 青野季吉「杉山氏小論」『三田文学』昭和十一年三月号。一九〇頁。
- (7) 矢崎弾、前掲書、三二六頁。
- (8) 矢崎弾、前掲書、三二七頁。
- (9) 阿部真之助「八裂き事件とジャーナリズム」『新人物論』所収。日本評論社。二八三頁。
- (10) 阿部真之助、前掲書、二九六頁。
- (11) 新居格『風に流れる』新時代社。昭和五年。一頁。
- (12) 杉山平助「下層一断面」(小説)『三田文学』昭和二年五月号。三八頁。
- (13) 室伏高信『椰子』育生社弘道閣。昭和一七年。
- (14) 大宅壮一『モダン層とモダン相』大鳳閣、昭和五年。一八七頁。
- (15) Leo Lowenthal, "Biographies in Popular Magazines" in *Reader in Public Opinion and Communication*, edited by Berelson and Janowitz, Free Press, 1950, 289-298.
- (16) 新居格、前掲書、二〇二頁。
- (17) 矢崎弾、前掲書、三二五頁。

マス・ジャーナリズムとしての批評(二)

マス・ジャーナリズムとしての批評 (一)

- (18) 新居格『生活の窓ひらく』第一書房、昭和十一年。一九七―一九九頁。
- (19) 大宅壯一、「文壇ギルドの解体期―大正一五年における我国ジャーナリズムの一断面―」『新潮』大正一五年二月号。
- (20) 鶴見俊輔、前掲書、一三八頁。
- (21) 杉山平助「下層―断面」『三田文学』第二卷第五号、昭和二年五月一日。五四頁。
- (22) 新居格『野雀は語る』青年書房、昭和一六年。二七六頁。
- (23) 杉山平助「大陸的新日本人を論ず」『文芸春秋』昭和十三年五月号。一三〇頁。
- (24) 杉山平助『支那と支那人と日本』、昭和三年。四二七頁。